

黒部川扇状地圃場整備前地表面等高線図（籠瀬良明による）における断層変位地形の表現

Fault displacement topography represented by "the Contour Map of the Kurobe Alluvial Fan before Land Modification"

熊木 洋太^{1*}

Yohta Kumaki^{1*}

¹専修大学

¹Senshu Univ.

活断層については、その存在、地表での位置、変位の向き、平均変位速度といった特性の多くが、変位地形を調べることで明らかになる。断層変位地形の調査では、空中写真と精度のよい等高線が描かれた地形図が欠かせない。現在の日本では、平野部の多くの場所で多かれ少なかれ地形が人工改変を受けていることが多いが、本来の断層変位地形を知るには、大きな人工改変が行われる以前の地形の情報が欲しいところである。しかし、人工改変前の空中写真を入手できても、1m程度の間隔の等高線情報は手に入らないことが多い。

黒部川扇状地地域は、主に1970年代に大規模に圃場整備が行われ、地形が改変された。圃場整備では、比高数2~3m程度の低断層崖は消えないまでも、不鮮明になる可能性がある。この地域にある魚津断層帯不動堂断層の変位地形についても、現在の地形はその影響を受けていると考えられる。これまでの研究（中村，2005；松浦ほか，2007）では、変位量の詳しい計測は圃場整備後の地形について行われているだけである。

黒部川扇状地地域については、日本大学の地理学の教授であった籠瀬良明（1911-2000）が、「黒部川扇状地圃場整備前地表面等高線図」（1:12,500，2図葉）を作成し、1986年に公表している。これは、主として圃場整備用の計画図（1:1,000~1:2,000）をもとにし、0.5m間隔の等高線が描かれているものである。扇状地面上の微細な旧河道地形などが精細に表現されており、圃場整備による人工改変を受ける前の断層変位地形がどのように表現されているかは興味深い。そこで本発表では、この等高線図により不動堂断層の変位地形がどのように表現されているか、変位量はどの程度と見積もられるかなどについて論じる。

キーワード:断層変位地形,等高線図,地形の人工改変,黒部川扇状地,不動堂断層,籠瀬良明

Keywords: fault displacement topography, contour map, artificial landform modification, Kurobe Alluvial Fan, Fudodo fault, Prof. KAGOSE Yoshiaki